

朔東も既に初冬の佇まいである。日高山脈や大雪山系、雌阿寒岳を除く阿寒山系等の頂上部も白く冠雪しており、峠道も時には圧雪やアイスバーンになったりもする。平野部に白いものが舞うのも間近だろう。

さて、本日(H14/11/2)、旧国鉄士幌線のコンクリートアーチの写真を撮ると思いきや糠平に出掛けたが、驚く勿れ糠平では冬将軍が荒れ狂っており、写真を撮る等とはとんでもない事で、這々の体で逃げ帰った。帯広市内でも雪が少々だが舞った。たかが、旧国鉄士幌線の橋云々などと言わないで欲しい、これは平成13年10月に選定された「北海道遺産」の一つなのだから。



(糠平にて 11/2)

さて、朔東地域には北海道遺産に選定されたものが数個存在する。平成9年4月に道知事が「北の遺産構想」を提唱したことに始まる。北海道遺産とは、北海道の豊かな自然やそこに住む人々にとって築き上げられてきた文化や産業、生活など様々な価値の中から、次世代に引き継ぎたい有形・無形の財産であり、平成11年度から12年度にかけて種々検討がなされ、平成13年5月には、北海道遺産構想の本格的な推進を図る為の民間推進組織『北海道遺産構想推進協議会』が設立され、北海道遺産の選定がなされた。

道民から募集した候補の中から順次絞り込み選考が行われ、平成13年10月15日に開催された「北海道遺産構想推進協議会理事会」において第一回目の北海道遺産が選定された。第一回選考では、25が選考された。北海道共通の遺産(推進協議会が共通のものと認定しているわけではないが、何処にでもあるものであり、共通と称したほうが良いのではないかと考える)として、アイヌ文様、アイヌ語地名、北海道ラーメンがある。25個の内訳を見ると矢張り古くから開けたところが多数選ばれていると言う感じがする。

朔東地域からは、6個の地域と史跡が選ばれた。曰く、① 霧多布湿原 ② 旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群 ③ 螺湾ブキ ④ 摩周湖 ⑤ 根釧台地の格子状防風林(中標津町など) ⑥ ピアソン記念館

① 旧国鉄士幌線のコンクリートアーチ橋群

国鉄士幌線は、帯広と東大雪(大雪山の東側)を結ぶ山岳路線であった。大雪山国立公園内を走る為、渓谷美に相応しい橋を架けた。糠平湖周辺の開拓遺産として残されている10箇所余りのアーチ橋は北海道遺産だけではなく、国の有形登録文化財にも指定されているものもある。

特に 110 メートルの白いタウシュベツ川橋梁は時期により、水没し、水量によっては眼鏡橋にもなり、6,7 月の水が干上がる頃は全体の姿を現す。彼のローマ人の物語りの著者である塩野七海女史の描く古代ローマの水道橋もこのようなものだったのではと思わせるものらしい。来年には写真をアップ出来る筈だ。

② 螺湾藪

朔東から第 40 号を参照

③ ピアソン記念館

米国エリザベス市出身の宣教師ジョン・ベック・ピアソンは、明治 21 年来日、教職生活を経て各地で農村伝道、次いで道内各地での伝道を経て、大正 3 年北見市に移住、道東・道北各地での伝道に携わりながら、廃娼運動など社会浄化運動の先頭に立つなどの活動を行い、昭和 3 年、15 年に亘る日本での伝道活動を終えて帰国した。このピアソン夫妻の遺徳を讃え、当時の私宅を復元、遺品等を展示して 1971 年（昭和 46 年）5 月に、記念館として保存した。木造二階建てのスイスの山小屋風の西洋館である。三本の柏の古木や榆の大木が聳え、夕焼けと町並みが一望出来る。

④ 根釧台地の格子状防風林

標津町、別海町、中標津町、標茶町に跨る格子状防風林は、圧巻である。幅 200m 弱の林は、防風効果は勿論、野生動物の生息地・移動経路としても効果があると考えられている。本来は開拓当時の区域表示であったものようだ。十勝の防風林も素晴らしいが、それを上回るものようだ。機会を見て確認したいものだ。

⑤ 摩周湖

北海道屈指の景勝地であり、今更説明の要もあるまいが・・。透明度は 41.6m で世界第一位（1931 年調査）であり、神秘に満ち、周囲は、21km の高さ 300 から 400 メートルの崖を持つ外輪山があり、人の近づくのを拒否している。流れ込む川はもちろん流れ出ずる川とてなく、湖水は殆どが雨水であり、水温も低く、湧き出ている神の子池では年間を通じ 8 度 C である。一日 7 回色を変えとも言われるが、観光シーズンには霧が発生して、全体を眺めることが出来ないことが多い。摩周ブルーと周囲の景観北海道を代表する景観とあって良い。世界遺産への登録を目指す運動が活発化している。

⑥ 霧多布湿原

なんと情感ある名前だろう。この湿原が北海道遺産に選ばれた理由は、海と海岸段丘・低平な島嶼・後背部の森林を合わせて、湿原景観を構成する要素が、コンパクトに一望出来る。日本で最初に天然記念物に指定された「泥炭地形成植物群落」を持ち、観察拠点としての湿原センターが良く整備され、ボランティア・ガイドの解説を受けながら各種の植物群落に接近して観察することができるということである。湿原保全が水産資源の維持に効果的、後背地の農業も環境保全型農業を目指すなど自然と産業との見事な調和モデルとしての価値がある。